
「総合的な学習の時間」における「生きる力」の育成

知のフロンティア～新しい学びの創造～

1 はじめに～学校の現状と課題～

本校は平成29年度に創立140年を迎える県下随一の伝統校である。理想主義に基づく全人教育の伝統が、文武両道の追求という形で今も生きている。学習面で安定して高い進路実績を残しながら、部活動においても平成29年度高校総体総合優勝などの優れた成果を上げることができている。

一方、科学技術が日進月歩の進展を遂げ、それを支える学問領域が横断的な方向へと深化統合している今日、本校においても新しい学びの方法を模索することは急務である。将来の自己実現に向けて、自己教育力を身につけた、創造力・表現力豊かな生徒の育成が求められている。また、今日的な課題を踏まえて、活動的な学習形態や英語運用能力的展開を今まで以上に重視することも求められている。

このような現状を鑑み、本校生徒の「生きる力」をあらゆる方面に伸長させるための枠組みを、「総合的な学習の時間」に見出すことができると考え、以下のような実践を行っている。

2 「総合的な学習の時間」の位置づけ

(1) 本校の「総合的な学習の時間」(以下「総合学習」)は、生徒が自己の興味・関心に応じて自ら課題を設定し、その課題の解決を図る主体的学習を進めていく中で、生徒自身の自己実現を図る力・「生きる力」を培うことを目標とする。

(2) 本校に対する多くの生徒・保護者及び地域の期待は、社会で有為な人材として活躍できる実力を生徒に身につけさせること、その礎を築くことである。生徒が、課題探求能力や学習意欲が脆弱であっては、卒業後の社会で十分な成果を期待することは困難である。「総合学習」を主体的な学習態度を育成する上で重要な役割を担う時間と位置付け、その力が養われる時間となるよう学習計画を立てる。

3 ねらい

「知のフロンティア～新しい学びの創造～」を学校テーマとして、内発的動機に基づいた学びの集団を形成し、自主的な学習能力の育成を図る。さらに、学年ごとにもテーマを設け、生徒に自己の興味・関心・進路希望等に応じた課題を自ら設定させ、その課題解決を通し、成就感と自信を持たせる。また、自己の在り方・生き方についての考察を深めさせ、学ぶ意欲の向上と学ぶ手法の体得を図り、自己実現のための能力と態度を培う。

4 概要

・1年生「現代社会を見つめる」

生徒に現代社会が抱えている様々な課題を自ら選ばせ、その課題解決を通して成就感と自信を持たせ、自己実現を図る能力と態度を培う。学習形態としては「ポスターセッション」を用い、課題考察力、他にも社会人講演会や大学・企業・研究所訪問(研修旅行)を実施。

・2年生「自己を見つめる」

生徒に自己の興味・関心・進路希望等に応じた課題を自ら設定させ、その解決策を探りながら、自己の在り方・生き方について考察させる。他にも社会人講演会やオープンキャンパスによる模擬授業・大学研究等を実施。

・3年生「将来を見つめる」

各教科で学習した個々の知識や技能を、前年までの「総合学習」と関連づけ、学習の深化や生き方についての理解の深化を図り、将来の自己を考察する。論文作成を柱に、英語論文まで作成させ、3年間の総合学習の総まとめをする。

5 実施方法について

本校は65分授業を実施し、週ごとにA週・B週の時間割表を用いている。「総合学習」は二週に一度実施し、学年ごとに重ならないようにしている。

6 主な実施内容

1年

- ・新入生オリエンテーション
- ・社会人講演会
- ・研究テーマの決定とゼミの編成
- ・研究テーマ発表（研究の意義と方法、見通し発表）
- ・研修旅行（日帰り・東京方面）
- ・研修訪問成果のまとめと討論会
- ・ポスターセッション
- ・代表者ポスターセッション

2年

- ・2学年オリエンテーション
- ・英語文献の読解により世界的視野で問題を考察
- ・ゼミ編成
- ・新たなテーマ決定と発表会
（研究の意義と方法、見通しを発表）
- ・中間発表会
- ・ポスターセッション（ゼミ内）
- ・代表者ポスターセッション

3年

- ・第3学年オリエンテーション
- ・論文の書き方・構成の把握
- ・現代の諸課題に関する論文作成
- ・自己の進路希望に関する論文作成
- ・学術的な課題に関する論文作成
（各論文を記述するたびに、グループの編成、輪読会、考察）
- ・英語論文の作成

7 研究課題設定の条件

研究課題は各生徒が以下の条件に基づいて設定する。

- (1) 基本的に自分自身の力で問題解決できる課題。
- (2) 年間を通して長期に取り組める課題。
- (3) 主に学校の施設・設備を利用し、授業時間内に取り組める課題。
- (4) 前橋高校の総合学習の趣旨にふさわしい学術・文化的な課題。

自分の興味・関心がある内容をテーマとすることは、自己の進路を探究することと重なる。それは広い意味で捉えれば進路学習でもある。そこで、1年生の研究テーマは、将来大学へ進学して学問を行う基礎をつくる観点に立ち、広い分野から設定する。2年生の研究テーマは、より具体的な進路希望を踏まえ、1年次のテーマを深化させ学部系統的な色彩を強めた形とする。3年生では進学後の学問研究にスムーズに接続させることを目的とし、英語論文のテーマを決定する。

なお研究課題設定の参考に、以下のテキストを使用する。

1年……『現代用語の基礎知識2017』（自由国民社）

2年……『Your Own Future』（いっずな書店）

3年……『2017年の論点100』（文藝春秋）

8 研究成果の指導、提出について(1、2年生)

(1) 研究成果をポスター及びサマリーとしてまとめ提出させる。本校の総合学習は、生徒自らが課題設定をし、その課題解決を図る活動である。その成果としてのポスター及びサマリーは、テーマについて主張し、読み手を説得するための文章でなければならない。次のような条件を備えている必要があるとともに、評価の観点となる

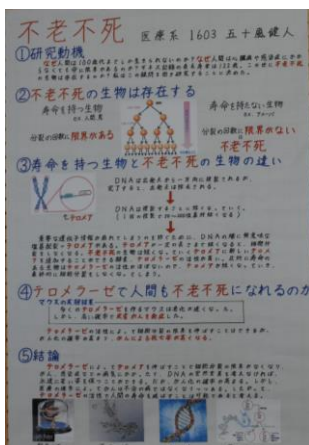
- ① 主張が明確であること
- ② 主張のための根拠が説得力に富んでいること

さらに、著作権の問題を理解させ、資料の出典元を明記させる。ポスター作成にあたって、生徒には最低2冊以上の資料文献を読むよう指導し、主義主張を取捨選択し、生徒本人の考え、主張をもつように促す。

(2) サマリーは文書データにして、生徒各自がUSBメモリ等に保存して提出。提出先は各ゼミ担任とする。

(3) ポスターについては

- ・ゼミ内発表はA3で作成し、ゼミ担当が評価したのち、生徒各自保管。



研究成果を発表するためのポスター

- ・代表者発表は模造紙半分の大ききで作成。総合系の教員が写真データで保管。作成したポスターはゼミ担当が評価したのち、生徒各自保管。



代表者ポスターセッションの様子

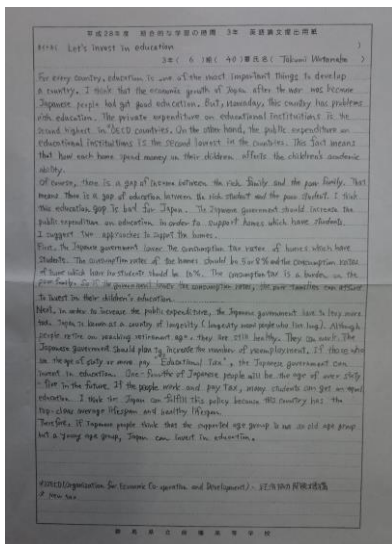
9 論文の指導、提出について(3年生)

(1) 3年生では、固定的なゼミ所属を避け、論文作成のたびにテーマ別で班編成を行う。

(2) 論文の書き方指導を行ったうえで、それぞれの進路分野で話題となっている問題について、基本的な見識や自己の見解をもたせることに主眼を置いて指導を行う。

(3) 演習と評価をセットに、**3回の論文作成**を行う。評価の内容は、輪読会等により自己評価および相互評価を生徒のグループで行う。最終的に、各生徒が記述した3編の日本語論文のうち秀逸と考える1編と、それを英文にした論文を提出する(手書きのもの可)。

(4) 3回のテーマは、「現代の諸課題に関する論文」「自己の進路希望に関する論文」「学術的な課題に関する論文」とし、当該学年団が、具体的問題作成にあたる。字数は、65分授業の中、800字前後(日本語)を基本とする。



英語による論文

10 開設ゼミ講座

学年所属の教員数、教室数等を考慮し、学年あたり**10前後**のゼミを基本数とする。学年進行とともに進路学習の観点を深めていくが、1ゼミあたり20人〜40人を標準とし、2年次にゼミの組み替えを行う。ゼミの系統は固定せず、該当学年の生徒の実態に応じて編成する。以下は、平成28年度に開設したゼミ名である。

1年：地球科学系 生物・化学系 数学・情報系
工学系 医療系 人間・社会系
政治・経済系 国際学系 心理・教育系
文化・芸術系

2年：法律・政治系 経済系 心理・教育系
人文・語学・国際系 数学・情報・物理系
生物・農学系 工学系 化学・薬学
医学系・歯学・医療系

11 評価について

(1) ポートフォリオ評価法の実施

生徒の一定期間の学習活動の履歴をできるだけ多く収集し、生徒の学習活動の全体像を把握するとともに、生徒の伸長や変容を見ようとする評価法を行う。各時間の自己評価や資料を全て1冊のファイル『個人研究計画書』に保存していく。

ーポートフォリオ評価を採用する理由ー

日常の学習過程において、あまり綿密な評価を行おうとすると、評価そのものが負担になり、かえって学習の障害になりかねない。したがって、その時間のグループや個人の学習が記録され、担任や担当教員がそれを確認して、意見や助言、感想として学習ノートや記録などの形で生徒にフィードバックできるようなシステムを考える必要がある。簡単な文章であっても、活動を記録することが『自己評価』、『相互評価』の原形になっていき、その積み重ねのうえに中間・まとめの総括的な評価が可能になる。また、記録することによって、グループや個人の活動が意識化され、形成的な態度を育てることにもなる。

(2) 評価の観点と記入方法

評価の観点は、相対評価ではなく、個人内評価であり。以下の点に注意し評価する。

- ① 学習内容に興味・関心がもてたか(関心・意欲・態度)

- ② 課題を発見し、調査研究することができたか(思考・判断)
- ③ 調査・研究を分かりやすくまとめることができたか(知識・理解)
- ④ 発表や討論に参加できたか(技能・表現)
- ⑤ 新たな発見があり、自分自身の考えを持つに至ったか(自己の生き方・在り方)

以上の観点に基づき、生徒自身が毎回の授業で自己評価する(ポートフォリオ)。ゼミ担当者はこれらの資料を参考にし、絶対評価をする。

1.2 成果

1・2年生は各自の研究成果をポスターという形で結実させる。その後各ゼミ内でポスターセッションを行うので自分の研究や発表が必然的にブラッシュアップされる。各ゼミの代表者は学年発表会でのポスターセッションを行うので、より良い発表ができるようさらに研究を深めることとなる。2年生では1年次の経験を活かすことでさらに研究の度合いが深まるので充実した内容となり、発表にも磨きがかかる。さらにセッション形式を採用することで、他生徒の発表の長所を自分のものとし、自分の発表に生かすことができる。2年間の高レベルなポスターセッションの結果として、生徒は自己の探究能力・プレゼンテーション能力を高めることができる。

3年生は、1・2年次で身に着けた能力をもとに、自分の意見を英語で論述する。授業で学んだ英語能力を論文と言う形で表現することは、教科という枠を越えた「総合学習」特有の学びの形である。

各学年とも肝要なのは協働的な学びということである。生徒が、自己満足で研究を終わらせることなく、また書籍やインターネット上の情報からの引用のみならず、批判的精神に基づく自己の意見表明をするために同僚的視点を獲得することは、非常に有意義である。研究自体は個人的作業になる部分もあるが、中間発表で他の生徒の進捗状況の確認や研究の軌道修正ができる。最終的には他の生徒とゼミ担当教員の理解や賛同を得られる必要があり、多くの情報交換を求められることとなる。論述力、プレゼンテーション能力はもちろん、人間関係調整力、問題解決力、コミュニケーション力など、社会で求められる能力の多くを、この「総合学習」で育むことができる。自己実現を図り、生きることを楽しむ力が育つのである。

1.3 課題

(1) 時間の確保

質の高い研究を行うためには、図書資料やインターネットなどを用いて入手する「情報」と、収集した情報を整理・比較・研究する「時間」が必要である。本校では豊富な蔵書を持つ図書館と、比較的自由に使用可能なコンピューター室があるので、「情報」の入手はしやすいかもしれない。しかしながら、「時間」の確保には厳しい面があることは否めない。日常の授業の予習や復習に加え、課題や自主的な学習に励み、さらには部活動にもまじめに取り組む本校生徒にとって、「総合学習」のための研究的な時間を自主的に確保することは困難かもしれない。

また、学校のカリキュラムにおいても、授業時間として「総合学習」の時間を十分に確保することができない。最低限の授業時間の中で最大限の効果をあげるべく、生徒・教員ともに努力をしているが、現実的にはもう少し「総合学習」の時間が確保できると、余裕をもって研究ができるかもしれない。

(2) 自主性

本校の「総合学習」はその活動のほとんど全てを生徒の自主的な活動に根ざしている。高い意識を持って活動している生徒がほとんどだが、その自主性を常に維持させるための方策が、教員側にも求められている。たとえば、これまではポスターの代わりに論文を作成させていたが、中には図書やインターネット上の情報をそのまま引用しただけのものがあつたりもした。一定数の生徒は、情報を活用しながら自らの見解を示すという本来の論文の在り方を理解できなかつたり、そこにたどり着くためのモチベーションを維持できなかつたりしたようである。そこで、新たな試みとしてポスターセッションを取り入れた。このように指導法の転換も含めた工夫を随時考えて、生徒が自主的に行動しやすい環境を整えて行かなければならない。

(3) 専門的な指導

1、2年生はゼミ形式で研究を深めていくが、ゼミを担当する教員が必ずしもその分野に長けているとは限らない。生徒の個々の研究が深まれば深まるほど、教員側の指導は手薄になる。生徒が教員の手を離れて自由に研究を深めることは良いことでもあるが、専門的な指導ができればさらに内容が深まることもあるだろう。専門性を担保するために外部指導者を招くなど、いくつかの方策を検討しなければならない。